

# 昭和16年12月7日の早明戦

——戦争は日常生活の中で突如として始まる

2024年12月 復刻  
弁護士 内田 雅敏

## 1941（昭和16）年12月7日の早明戦

早慶戦と云えば学生野球の花形だが、学生ラグビーの花形は早明戦と云われている。早明戦が最初に行われたのは1923（大正12）年12月24日、4対3で早稲田が勝った。

以降、戦争による中断はあったものの、現在に至るまで、縦の明治（フォワードで縦に突進）、横の早稲田（バックスで横に展開）という両校ラグビーの特徴もあり、大学ラグビーの伝統の一戦として、数々の名勝負が展開され、多くの伝説も生まれた。もっとも最近では、早稲田もフォワードを重視し、明治もバックスを重視しており、両校の特色はそれほど鮮明ではなくなった。フォワードの下支えがあつてこそバックスが生きる。

この早明戦、かなり早い時期から、毎年12月の第1日曜日に行われるようになった。1941（昭和16）年の12月の第1日曜日は12月7日であった。翌12月8日未明午前3時35分（米ハワイ時間7日午前7時55分）、日本海軍による真珠湾奇襲攻撃によって日・米開戦となった。この一撃は、ルーズベルト大統領を激怒させ、米国民の憤激を呼び起こした。そしてこれで米国が参戦し、ナチスドイツと日本を負かすことができる、と重慶の蒋介石総統、ロンドンのチャーチル首相、クレムリンのスターリン書記長を小躍りさせた。重慶に移動していた大韓民国上海臨時政府の面々も日本の敗戦により韓国は植民地支配から脱することが出来ると喜んだ。

前日の12月7日の第一日曜日、この日、ラグビー早明戦が行われ、早稲田が26対6で勝った。

密かに択捉島の<sup>ひとかっぶ</sup>単冠湾に集合した日本海軍の機動部隊は、すでにハワイの真珠湾に向けて航行して

おり、攻撃の準備万端、他方、西太平洋では台湾から陸軍の上陸部隊を満載した日本陸軍の輸送船団が目的地マレー半島に向け出港していた。このようなときに日本国内ではラグビーの早明戦が行われていた。

母校の勝利に気をよくし、明け方まで痛飲し、自宅で寝ていた東京日日新聞（現毎日新聞）の某記者は、本社からの電話でたたき起こされ、「しまった！今日だったのか」と大慌てで本社に向かったと云う。

戦争は、日常生活の中で、突如として始まる。筆者の父の実家は、愛知県は東三河の山村にあった。1941年12月8日の前日の7日、種付けのために牛を連れて峠越えをして隣村に出かけた祖父が夜になっても戻らないため、深夜、父たち兄弟が峠を越えて隣村まで捜しに行った。祖父は訪問先で酒の接待を受け気持ちよく寝ていた。安心した父らは8日未明、それぞれ家に戻ったところ、ラジオから真珠湾攻撃の臨時ニュースが流れており、驚き、これからどうなるだろうと不安を覚えた、生前の父が述懐していた。



2023年に100年目を迎えたラグビー早明戦

## 戦争賛美に雪崩を打った日本の知識人たち

真珠湾奇襲攻撃による日米・英戦争が開始されるや、「天皇あやふし」と高村光太郎、伊藤整ら日本の知識人は、永井荷風、中島敦、清沢洌きよしらの一部例外を除いて、一斉に戦争賛美に変わってしまった。

魯迅研究者で「戦後知識人」の代表的な一人である竹内好は『中国文学』80号（1942年1月）に以下のような巻頭言「大東亜戦争と吾等の決意宣言」を書いた。

歴史は作られた。世界は一夜にして変貌した。われらは目のあたりそれを見た。感動に打顫へながら、虹のやうに流れる一すぢの光芒の行衛を見守つた。（中略）戦争はあくまで避くべしと、その直前まで信じてゐた。戦争はみじめであるとしか考へなかつた。實は、その考へ方のほうがみじめだったのである。卑屈、固陋、囚はれてゐたのである。

戦争は突如開始され、その刹那、われらは一切を了得した。一切が明らかとなった。天高く光清らに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた。こゝに道があったかとはじめて大覚一番、願れば昨日の鬱情は既に跡形もない。（中略）十二月八日、宣戦の大詔が下つた日、日本国民の決意は一つに燃えた。（中略）この世界史の変革の壮挙の前には、思へば支那事変は一個の犠牲として堪へ得られる底のものであつた。支那事変に道義的な苛責を感じて女々しい感傷に耽り、前途の大計を見失つたわれらの如きは、まことに哀れむべき思想の貧困者だつたのである。（中略）大東亜戦争は見事に支那事変を完遂し、これを世界史上に復活せしめた。今や大東亜戦争を完遂す



るものこそ、われらである。（中略）耳をすませば、夜空を掩つて遠雷のやうな轟きの飴するのを聴かないか。間もなく夜は明けるであらう。やがて、われらの世界はわれらの手をもつて眼前に築かれるのだ。

1942年2月のシンガポール陥落に歓喜した室生犀星も、以下のような詩を発表した。

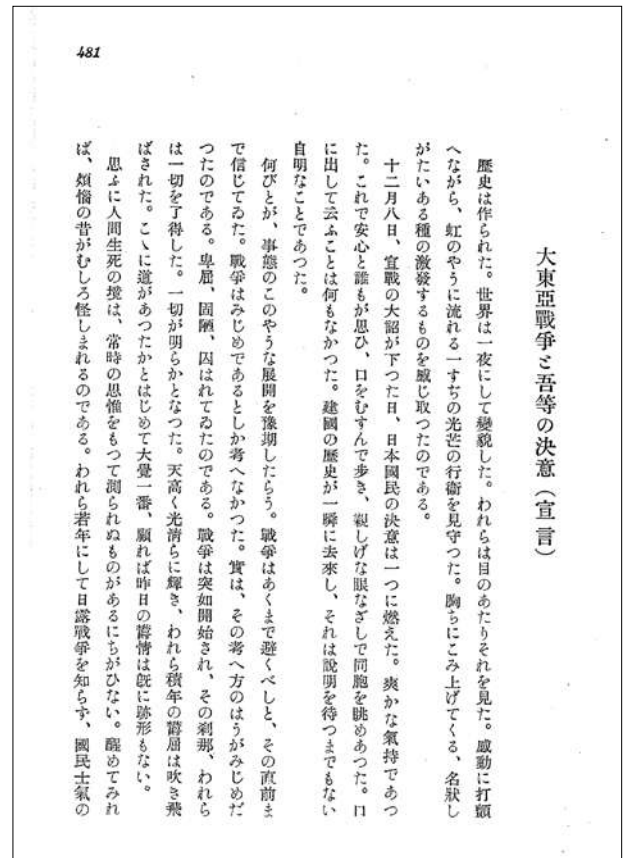
皇軍向ふところ敵なし／進撃また進撃／砲火虹のごとく

マレーを陥し入れ／香港を打ち抜く／怒濤は天に逆巻き／敵拠地シンガポールを屠る

この日／日本はしんとして／その父と母とは打ち寄り／すめらみくにのみみつを説く／こどもらよ／兄よ／妹よ／ゆめにはあらず

シンガポールは陥ちたり／ことほぎまつれ／つはものを讃へよ

歴史にもかゞやけ／シンガポールは陥ちたり／シンガポールの燈火は消えたり／百年の魔の都に／日のみ旗たてり／シンガポールは陥落せり



『中国文学』に掲載された「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」

真珠湾攻撃の戦果に酔った横光利一は、日記に「戦いはついにはじまった。そして大勝した。先祖を神だと信じた民族が勝ったのだ。自分は不思議以上のものを感じた。それはもっとも自然なことだ。自分がパリに居るとき、毎夜念じていた伊勢の大廟を拝したことがついに顛れてしまったのである」とまで書いてしまっている。

このような風潮の中で永井荷風『断腸亭日乗』(岩波文庫) 昭和16年12月12日は以下のように記す。

開戦布告と共に街上電車その他至処に掲示せられし広告文を見るに、屠れ英米我らの敵だ、進め一億火の玉だとあり、或る人戯れにこれをもじりむかし英米我らの師困る億兆火の車とかきて路傍の共同便所処内に貼りしといふ。現代人のつくる広告文には鉄だ、力だ、国力だ、何だかだとダの字にて調子を取るくせあり、まことにこれ駄句駄字といふべし。……

今、検察官として竹内好や室生犀星を弾劾しようというのではない。何が、竹内ほどの人物をしても「支那事変に道義的な苛責を感じて女々しい感傷に耽り、前途の大計を見失ったわれらの如きは、まことに哀れむべき思想の貧困者だったのである」とまで書かせてしまったかということについて考えなくてはならないと思う。

それにしても、「戦闘精神は、あらゆる観念論とは反対に実証的精神である。しかも現在、戦争という最大の実践を通じて、東亜の現実、世界の現実は大きな変貌を遂げつつあるのであって、『撃ちてしまわむ』という偉大な戦闘精神は同時に雄渾な神話である。これが日本の戦闘精神である」というような一文の筆者が、治安維持法違反により投獄され日本の敗戦直後の1945年9月に獄死した三木清であることを知られるとき(堀田善衛『若き日の詩人たちの肖像』)、絶望的となる。

他方で、中島敦や清沢洌の以下のような文章に出会うと救われる。

南洋群島の土人の間で仕事をしてゐた間は、内地の新聞も雑誌も一切目にしなかった。文学などといふものも殆ど忘れてゐたらしい。その中に戦争にな

った。文学に就いて考えることは益々なくなつて行つた。数か月してから東京へ出てきた。気候ばかりでなく、周囲の空気が一度に違つたので、大いに面食らつた。本屋の店頭には高く積まれた書物共を見て私は実際仰天した。(中略)

思えば自分は今迄章魚木の下で、時局と文学とに就いて全く何とノンビリとした考え方しかしてゐなかつたことかと我ながら驚いた。(中略)。戦争は戦争、文学は文学、全然別のもつと思ひ込んでいた。(中略) 成程、文学も戦争に役立つのかとその時始めて気が付いたのだから、随分迂闊な話だ。しかし、文学者の学問や知識による文化啓蒙運動が役に立ったり、文学者の古典解説や報道文作製術が役に立ったりするのは、之は文学の効用といつて良いものかどうか。文学が其の効用を發揮するとすれば、それは、斯ういふ時世に兎もすれば見のがされ勝ちな我々の精神の外剛内柔性——或ひは、気負ひ立った外面の下に隠された思考忌避性といったやうなものへの、一種の防腐剤としてであらうと思はれるが、之もまだハッキリ言ひ切る勇氣はない。現在我々の味はひつつある感動が直ぐに其の儘作品の上に現れることを期待するのも些か性急に過ぎるやうに思はれる。自己の作物に時局性の薄いことを憂へて取つて付けた様な国策的色彩を施すのも少々可笑しい」(「章魚木の下で」)。

真珠湾奇襲攻撃から1年後の1943(昭和17)年12月9日、石橋湛山と並び称されたりベラリストのジャーナリスト清沢洌は「近頃のことを書き残したい気持ちからまた日記を書く」として、「昨日は大東亜戦争記念日[大詔奉戴日]だった。ラジオは朝の賀屋大蔵大臣の放送に始めて、まるで感情的叫喚



であった。夕方は僕は聞かなかったが、米国は鬼畜で英国は悪魔でといった放送で家人でさえもラジオを切ったそうだ。斯く感情に訴えなければ戦争は完遂できぬか。…」と書き始めた。この日記は清沢が風邪をこじらせ肺炎となり急逝した1945（昭和20）年5月21日の直前の同年5月5日まで書き継がれ、戦後、『暗黒日記』と題されて出版された。

山の画文屋辻まことに「虫類図譜」という一風変わった風刺画文集がある。辻は、「愛国心」という虫について「悪質極まる虫。文化水準の低い国ほどこの虫の罹患者が多いという説があるが、潜伏期の長いものなので、発作が見られないと、罹患者の事実は解らない。過去にこの島では九十九%がこの発作による譫妄症状を呈したことがあり。死ぬまで治らぬ後遺症状があるから、現在、この島の住民は、その健康を信ずることができない。現在なお一寸したチンドン屋のラッパにもすぐ反応する症状を散見することがある」（ちくま文庫）と解説している。

「世論」虫についての解説も面白い。「微小であるという。巨大でもあると言う。全然存在しないともいう。新聞紙のミノから生まれ、新聞紙を食べ、テレビのブラウン管の中に育てられ、ラジオを子守歌に聴きながら成長し、新聞紙やテレビを支配する。やがてそれらを媒体として人々の脳に卵を産み付ける。それによって、人々は熱をともなった集団的発作を惹起することがある…といわれている」。現在<sup>いま</sup>は、新聞、テレビのほかにネットという怪虫が蠢動している。

ファールブルの『昆虫記』を最初に日本語訳したのは大杉栄だが、関東大震災のどさくさの中で大杉と共に憲兵隊に虐殺された伊藤野枝が辻まことの母であったことに妙な因縁を感じるのは私だけだろうか。

話を戻す。学徒兵として戦艦大和に乗り組み沖縄海域に向けて「海上特攻」出撃し、辛くも一命をとりとめ、後に、鎮魂の書『戦艦大和ノ最期』を書いた吉田満は、

「戦時中のわが言動の実態を吐き出すのではなく、逆に戦争にかかわる一切のものを否定し、自分を戦争の被害者、あるいはひそかな反戦家の立場に仕立てることによって、戦争との絶縁を図ろうとする風潮が、戦後の長い期間、われわれの周囲には支配的であった」（『戦艦大和ノ最期』決定版に寄せて1974年）と書いている。

「だまされたとさえ言えば、一切の責任から解放され、無条件で正義派になれるように勘違いしている人はもう一度よく顔を洗い直さなければならぬ。…騙されるということ自体がすでに悪である。……『だまされていた』と言って平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でもだまされるだろう」と1941（昭和21）年8月、『映画春秋』の創刊号に書いたのは映画監督の伊丹万作だった。

私たちは、私たちが熱狂しやすく、たやすく変ってしまえる人間だ（米大統領選挙を見ていると本当にそう思う）ということをしつかりと自覚したうえで、12月8日をこの国の来し方、行く末を想う日としたいと思う。



## 追記

敗色濃く、国民生活の窮乏も甚だしくなった昭和19年の『断腸亭日乗』には以下のような記述がある。

5月27日は「この頃ネズミの荒れ廻ること甚し、昼の中も台所に出て、洗濯シャボンを引行くほどなり。雀の子も軒にあつまりゐて洗流しの米粒捨てるを待てるが如し。むかしは野良猫いつも物置小屋の屋根の上に眠り折々庭の上に糞をなし行きしがいつよりともなくその姿を見ぬようになりぬ。東亜共栄圏内に生息する鳥獣飢餓の惨状また憐むべし。燕よ。秋を待たで速やかに帰れ。雁よ。秋来るとも今年は共栄圏内に来る莫れ」と記し、同月30日には、「数日前までは昼の中も折々天井を走廻りし鼠いかにしけん昨夜よりひっそりとして音を立てず台所にも落ちたる糞を見ざるに至れり。鼠群の突然家を去るは天変地妖の来るべき予報なりとも言えり。果たして然るや。暴風もやむ時来ればやむなり。軍閥の威勢も衰る時来れば衰ふべし。その時早く来れかし。家の鼠の去りしが如くに」。



そして敗戦後には以下のようにも記す

昭和24年6月15日、晴、午前木戸氏来話。夕刻より浅草。仏蘭西映画 La Grande Illusion を見る。帰途地下鉄入口にて柳島行電車を待つ。マッチにて煙草に火をつけむとすれども川風吹き来りて容易につかず。傍に佇立みたる街娼の一人わたしがつけて上げませう。あなた。永井先生でせうといふ。どうして知っているのだと問返すに新聞や何かに写真が出てゐるじゃないの。『鳩の町』も昨夜よんだわ。わたしこの間まで亀有にゐたんです。暫く問答する中電車来りたれば煙草の空箱に百円札参枚入れたるを与へて別れたり。

6月18日、晴、夕刻いつもの如く大都劇場に至る。終演後高杉由美子らと福嶋喫茶店に小憩し地下鉄入口にて別れ独電車を待つ時三日前の夜祝儀若干を与へたる街娼に逢ふ。その経歴をきかむと思ひ吾妻橋上につれ行き暗き川面を眺めつつ問答すること暫くなり、今宵も参百円ほど与へしに何もしないのにそんなに貰っちゃわるいわよと辞退するを無理に強ひて受取らせ今度早い時ゆっくり遊ぼうと言ひて別れぬ。年は廿一、二なるべし。その悪ずれせざる様子の可憐なることそぞろに惻隱の情を催さしむ。不幸なる女の身上を探聞し小説の種にして稿料を貪らむとするわが心底こそ売春の行為よりもかへって浅間しき限りと言うべきなれ。

赤坂電話局のとなりの盆栽屋西花園は花屋となり菊の切花多く並べたり。溜池四角にて新橋行電車に乗る。米国歩兵の一隊軍旗を先にして進み来るに逢ひ電車運転を中止すること二、三十分の長きに及ぶ。歩みて新橋に至れば日は没して暮靄蒼然たり。銀座通には燈火既にきらめき行人雑とうす。

十月十三日。毎月寄贈の出版物を古本屋に売りに参千余円を得たれば午後銀座千疋屋に赴き一昨日見たりし小禽を買ふ。籠金八百拾円、小禽金貳千五百円。

餌の稗五合にて金百円なり。この日午前高梨氏来話。市役所より市民税一回分九千余円の通知来る。悪税驚くべし。

筆者は上記のような荷風を好ましく思う。寄贈本を古本屋に売って、千疋屋に行くところなどなかなか人間的だ。

彼は若い頃、歌舞伎の「ツケ打ち」(役者の動きに合わせて木をバタバタと打って音を出し盛り上げる)をしていたこともあるようだ。ところが、上記から3年後の1952(昭和27)年11月、荷風に文化勲章が授与されることになった。

「不幸なる女の身上を探聞し小説の種にして稿料を貪らむとするわが心底こそ売春の行為よりもかへって浅間しき限りと言うべきなれ」という荷風の自覚からすれば、当然「辞退」と思いきや、結構、喜々として(正直と言えば正直だが)これを、拝受し、その様子を同年11月3日の日記に細々と記載しているのには、文化勲章は、勲何等とかいう一般の勲章

とは違うものであることは十重理解しつつも、やはり興ざめである。

「食卓に着席者の名札置きてあり。余の直ぐ左の席は高松宮宣仁親王、その左は陛下なり」といような記載を見ると、荷風は、「その左」の人について、「こいつ」のせいで（もちろん彼だけの責任ではないが）、日本国中が焼野原になり、アジアで2000万人以上、国内で310万人の人々が亡くなったことを考えなかったのだろうか、上記「不幸なる女の心情」に思いを馳せることはなかったのだろうか。この時、荷風散人七十四歳、

1919（大正8）年12月、小説『花火』で「大逆事件」について触れ、

「明治四十四年慶応義塾に通勤する頃、わたしはその道すがら、折々市ヶ谷の通りで囚人馬車が五、六台も引き続いて日比谷の裁判所の方へ走って行くのを見た。わたしはこれまで見聞した世上の事件の中で、この折程いうにいわれない厭な心持のした事はなかった。わたしは文学者たる以上この思想問題について黙してはならない。小説家ゾラはドレフュース事件について正義を叫んだため国外に亡命したではないか。しかしわたしは世の文学者とともに何もいわなかった。わたしは何となく良心の苦痛はたえられぬような気がした。わたしは自ら文学者たる事についてはなはだしき羞恥を感じた。以来わたしは自分の芸術の品位を江戸戯作者のなした程度まで引き下げるに如くはないと思案した。その頃からわたしは煙草入をさげ浮世絵を集め三味線をひきはじめた。わたしは江戸末代の戯作者や浮世絵師が浦賀へ黒船が来ようが桜田御門で大老が暗殺されようがそんな事は下民の興り知った事ではない — 否とやかく申すのはかえって畏多い事だと、すまして春本や春画をかいていたその瞬間の胸中をばあきれるよりはむしろ尊敬しようと思立つたのである」と書いた荷風はどこに行ってしまったのか。長生きも考えものである。もっとも、「荷風日記」には、軍部、官僚の愚劣さに対する批判はあるが、天皇制に対する批判は全く「記されて」いない。

ずっと後だが、『レイテ戦記』の著者大岡昇平は、「敗残兵」としての矜持から文化勲章の拝受を「辞退」した。

大岡昇平は『レイテ戦記』の末尾に以下のように書く。

レイテ島の戦闘の歴史は、健忘症の日米国民に、他人の土地で儲けようとする時、どういう目に遇うかを示している。

それだけでなく、どんな害をその土地に及ぼすものであるかも示している。その害が結局自分の身に撥ね返返って来ることを示している。

死者の証言は多面的である。レイテ島の土はその声を聞こうとする者には聞こえる声で、語り続けているのである。



#### 余事記載

明2025年は敗戦後80年、12月の第1日曜日は84年前と同じ12月7日。

今、台湾有事の喧伝の下、琉球列島が軍事要塞化され、自衛隊と米軍の一体化による軍事訓練が常態化されている。